『入中論』の菩薩階梯における滅尽定

太　田　蕗　子

はじめに

インド中観派の論師であるチャンドラキールティ（Candrakīrti, ca. 530–600）は，主著『入中論』（*Madhyamakāvatāra*(/-*bhāṣya*)）を『十地経』（*Daśabhūmikasūtra*）に基づき著している。その『入中論』の菩薩階梯の展開を確認すると，第六地から第八地の流れの中で「滅尽定」が重要視されている。『入中論』で滅尽定が重視される背景には『十地経』における「第六の菩薩地において，菩薩は滅に入定する」という所説がある。チャンドラキールティはその所説を受け，さらにその滅尽定を実際（bhūtakoṭi）・真如（tathatā）に入定することであると定義する。そのことから，チャンドラキールティにとって滅尽定に達するということは，菩薩が証得すべき真実を体得したということを意味しているといえる。それを踏まえて，ツォンカパ（Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357–1419）は『入中論』の註釈書である『密意解明』（*dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dgongs pa rab gsal*）において，その滅尽定を「〔帰謬派〕独自の滅尽定（'gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa）」と註釈し[(1)]，他と異なった滅尽定であるとしている[(2)]。本稿では，阿含・ニカーヤから阿毘達磨仏教における滅尽定（想受滅定）の用例を検討した上で，チャンドラキールティの『入中論』における滅尽定の思想を確認する。そして，チャンドラキールティの滅尽定思想をもたらした背景を探り，最終的にはチャンドラキールティの滅尽定解釈が独特であるのかをどうかを検討したい。

1　阿含・ニカーヤにおける想受滅定（滅尽定）

はじめに本節では，阿含・ニカーヤにおける想受滅定（滅尽定）の用例を確認する。滅尽定は初期仏教の伝統では，四禅定・四無色定の上にある最高位の禅定であるとされ，それらをまとめて九次第定という。ニカーヤの用例を確認すると，滅尽定という語は用いられず，想受滅定のみが登場する。そのほとんどが九次第定の流れの中での用例である。阿含・ニカーヤにおける滅尽定について取り扱った研究としては，長崎［1959］［1979］がある。その先行研究を糸口として想受滅定の用例を確認していきたい。以下に引用するのは，『マッジマニカーヤ』第25経「餌食経」（*Nivāpasutta*）における九次第定の文脈の中で見られる想受滅定の記述である。

> puna ca paraṃ bhikkhave bhikkhu sabbaso nevasaññānāsaññāyatanaṃ samatikkamma saññāvedayitanirodhaṃ upasampajja viharati. **paññāya c' assa disvā āsavā parikkhīṇā honti.** ayaṃ vuccati bhikkhave bhikkhu andham akāsi māraṃ, apadaṃ vadhitvā māracakkhuṃ adassanaṃ gato pāpimato, **tiṇṇo loke visattikan** ti. (MN 25 *Nivāpasutta*, PTS vol.1, 160.7-12.)
>
> さらにまた，比丘たちよ，比丘は，あらゆる点で，非想非非想処を超え，想受滅に達して住している。そして，**智慧によって見て，彼の諸々の漏は滅尽する**。比丘たちよ，この比丘が「マーラを盲目にし，マーラの眼を根絶して，悪しき者の見えざるところに行く者，**世間に対する執着を渡った者**」と言われる。(3)

四禅定，四無色定を説き，最後に想受滅定（滅尽定）に関してこのように示している。そして，九次第定の流れの中で想受滅定以前の非想非非想処定の段階では言及されなかった漏の滅尽ということがいわれ，世間に対する執着を渡りきった者であるという表現が登場する。同様の文言は『マッジマニカーヤ』と『アングッタラニカーヤ』において多く見られる。長崎［1959: 64］は以上の経文の「智慧によって見て，彼の諸々の漏は滅尽する」という一節に対して「解脱に達した自覚の告白を思わせる」と述べ，「世間に対する執着を渡った

者」に対して「涅槃に到達した聖者を意味している」と主張する。そのような考察から長崎［1959: 66］は「滅尽定とは証悟の告白，即ち涅槃の境地を定という言葉をもって表されたものであると言える」と結論づけ，三昧の中にひらけた解脱（涅槃）の境地であるとしている。

そこで，この『マッジマニカーヤ』第25経「餌食経」の一節に対するブッダゴーサの『アッタカター』を確認してみよう。

> **paññāya c' assa disvā** ti maggapaññāya cattāri ariyasaccāni disvā cattāro āsavā parikkhīṇā honti. **tiṇṇo** loke visattikan ti loke sattavisattabhāvena visattikā ti evaṃ saṅkhaṃ gataṃ, atha vā, "visattikā ti ken' aṭṭhena visattikā ? visatā ti visattikā...visamūlā ti visattikā. visaphalā ti visattikā. visaparibhogā ti visattikā. visālā vā pana sā taṇhā rūpe sadde gandhe rase phoṭṭhabbe"[(4)] ti evaṃ vā saṅkhaṃ gataṃ taṇhaṃ tiṇṇo nitiṇṇo uttiṇṇo, tena vuccati, **tiṇṇo loke visattikan** ti. (Ps PTS, vol.2, 163.15-23)
>
> **智慧によって見て，彼の〔諸々の漏は滅尽する〕**とは，道智によって四聖諦を見て，四漏は滅尽する。**世間に対する執着を渡った者**とは世間に執われ執着する状態にあるから「執着」とこのように言われる。あるいは「執着とはいかなる意味によって執着なのか。固執するから執着である。…毒の根を有するものであるから執着である。毒の果を有するものであるから執着である。毒を受用するから執着である。さらにまた，それは広大であり，色・声・香・味・触に対する渇愛である（Nidd I 9.9-21）」とこのようにも言われる。渇愛を渡り，越え，越え渡っている。それゆえ**世間に対する執着を渡った者**と言われた。

以上のように，想受滅定に住している者は，道智によって四聖諦を見て欲（kāma）・有（bhava）・見（diṭṭhi）・無明（avijjā）の四漏を滅尽させた者であると註釈される。また「世間に対する執着を渡った者」とは渇愛を超え渡った存在であるとされる。この註釈からも，想受滅定に入った者が覚りの状態にあることが分かる。以上の『アッタカター』からも，長崎［1959］［1979］の主張は補強されるといえ，滅尽定は阿含・ニカーヤの段階において覚りの状態を禅定

として表現したものと一まずはいえよう。

一方，禅定の中での安らぎを涅槃と取り違えて考えてしまうことが，阿含・ニカーヤから問題となっている。『マッジマニカーヤ』の第8経「削減経」（*Sallekhasutta*）は，煩悩の削減について説いている経典である。「世界」や「自我」に関する誤った見解を断つにはどうすればよいかを説いていく中で，禅定について言及し，それを現法楽住（初禅から無所有処），あるいは寂静なる住（非想非非想処）と述べるが，禅定のみでは煩悩の削減の実践にはなっていないと説く。

初禅

ṭhānaṃ kho pan' etaṃ cunda vijjati - yaṃ idh' ekacco bhikkhu vivicc' eva kāmehi vivicca akusalehi dhammehi savitakkaṃ savicāraṃ vivekajaṃ pītisukhaṃ paṭhamaṃ jhānaṃ upasampajja vihareyya. tassa evam assa: sallekhena viharāmīti, na kho pan' ete cunda ariyassa vinaye sallekhā vuccanti. diṭṭhadhammasukhavihārā ete ariyassa vinaye vuccanti. (MN 8 *Sallekhasutta*, PTS, vol.1, 40.27-41.1)

さらに，チュンダよ，次のような道理が見出される。ここである比丘はもろもろの欲望から確かに離れて，不善の法から離れて，尋をともない，伺をともない，遠離から生じた，喜と楽のある初禅定に到達して，住するであろう。彼にはこのような考えがある。「私は削減して住している」と。しかし，チュンダよ，これらは聖者の律[5]において削減とは言われない。これらは聖者の律において現法の楽住と言われる[6]。

非想非非想処

ṭhānaṃ kho pan' etaṃ cunda vijjati - yaṃ idh' ekacco bhikkhu sabbaso ākiñcaññāyatanaṃ samatikkamma nevasaññānāsaññāyatanaṃ upasampajja vihareyya. tassa evam assa: sallekhena viharāmīti na kho pan' ete cunda ariyassa vinaye sallekhā vuccanti. santā ete vihārā ariyassa vinaye vuccanti. (MN 8 *Sallekhasutta*, PTS, vol.1, 41.33-42.2)

さらに，チュンダよ，次のような道理が見出される。ここである比丘は

あらゆる点で無所有処を超え，非想非非想処に達して住するであろう。
彼にはこのような考えがある。「私は削減して住している」と。
しかし，チュンダよ，これらは聖者の律において削減とは言われない。
これらは聖者の律において寂静なる住と言われる。(7)

以上のように八等至を説き，禅定に住していながらも「私は削減して住している」と考える者の禅定は，仏教の教説において煩悩の削減にはならない，つまり解脱には繋がらないと示す。『アッタカター』を見ると，このような禅定を行うのは増上慢者であると説き，そのような増上慢を持っている比丘にとっては禅定が煩悩の削減の実践にならないと説く。

yena idh' ekacco bhikkhu bāhiraparibbājakehi sādhāraṇaṃ **vivicc' eva kāmehi...pe...paṭhamaṃ jhānaṃ upasampajja vihareyya.** yaṃ pana tassa evam assa sallekhena viharāmīti, yaṃ paṭipattividhānaṃ kilese saṃlikhati, tena viharāmī ti, taṃ na yujjati, na hi adhimānikassa bhikkhuno jhānaṃ sallekho vā sallekhapaṭipadā vā hoti. kasmā ? avipassanāpādakattā. na hi so jhānaṃ samāpajjitvā tato vuṭṭhāya saṅkhāre sammasati. jhānaṃ pan' assa cittekaggamattaṃ karoti, diṭṭhadhammasukhavihāro hoti. (Sv PTS, vol.1, 185.34-186.8)

ここである比丘が，〔仏教〕外の遊行者たちと共通な，**諸々の欲望を離れて，…初禅に到達して住するだろう。**さらに彼には次のような考えがある。「私は削減して住している」と，「諸々の煩悩を削る実践規定によって私は住している」と。それはふさわしくない。というのは増上慢の比丘には，禅定が削減や削減の実践にならないからである。なぜか。観を基盤にしていないからである。というのは，彼は禅定に入定して，その後，出定した後に，諸行を思惟しない。そうでなくて，彼にとって禅定は心一境性をなしているのであって，〔そのような彼には〕現法楽住がある。

以上のように『アッタカター』によれば，禅の増上慢者は「止（samatha; śamatha）」だけに偏り「観（vipassanā; vipaśyanā）」を基盤としていないから煩悩の削減をなすことはないと説く。このように止と観，どちらかに偏るのではない仕方で実

践していかねばならないことを強調している。そこで，経典はこの後，「そなたたちはここに削減を行うべきです」と説き，十善業道を初めとする行道によって煩悩を削減すべきであると説いていく。

同じ問題が『ディーガニカーヤ』の「梵網経」(*Brahmajālasutta*) においても取り上げられている。「梵網経」でも「削減経」と同じく「アートマン」と「世界」に関する見解（六十二見）が提示され，ブッダがそれらすべてを誤った見地であると退ける。その中で「現法涅槃論（diṭṭhadhammanibbānavāda)」の五見として非仏教徒が唱えたと思われる涅槃説が説かれている。以下に具体的に確認してみよう。

> idha bhikkhave, ekacco samaṇo vā brāhmaṇo vā evaṃvādī hoti evaṃdiṭṭhṭī: "yato kho bho ayaṃ attā pañcahi kāmaguṇehi samappito samaṅgibhūto paricāreti, ettāvatā kho bho ayaṃ attā paramadiṭṭhadhammanibbānaṃ patto hotīti". itth' eke sato sattassa paramadiṭṭhadhammanibbānaṃ paññāpenti. (DN 1 *Brahmajālasutta*, PTS, vol.1, 36.23-28)
>
> 比丘たちよ，ここで，ある沙門かバラモンは，次のような論を持ち，次のような見解を持っています。「友よ，実にこのアートマンは，五の妙欲を与えられ，そなえ，楽しんでいる。この限りにおいて，友よ，実にこのアートマンは，最高の現法涅槃を得ている」と。このようにある者たちは，いまここにいる有情の最高の現法涅槃を主張するのです（一見[8]）。
>
> tam añño evam āha: "atthi kho bho eso attā yaṃ tvaṃ vadesi. n' eso n'atthīti vadāmi. no ca kho bho ayaṃ attā ettāvatā paramadiṭṭhadhammanibbānapatto hoti. taṃ kissa hetu ? kāmā hi bho aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā tesaṃ vipariṇāmaññathābhāvā uppajjanti sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā. yato kho bho ayaṃ attā vivicc' eva kāmehi vivicca akusalehi dhammehi savitakkaṃ savicāraṃ vivekajaṃ pītisukhaṃ paṭhamajhānaṃ upasampajja viharati. ettāvatā kho bho ayaṃ attā paramadiṭṭhadhammanibbānaṃ patto hotīti". itth' eke sato sattassa paramadiṭṭhadhammanibbānaṃ paññāpenti. (DN 1 *Brahmajālasutta*, PTS,

vol.1, 36.29–37.6)

それについて，他の者は，次のように言います。「友よ，あなたが説くところのこのアートマンは実に存在する。私はこれが存在しないとは言わない。しかし友よ，このアートマンは，この限りにおいて最高の現法涅槃を得ているのではない。それはなぜか。というのは，友よ，諸々の欲望は，無常であり，苦であり，変化を本質とするものであり，それらの変化・変質が生じ，愁い，悲しみ，苦しみ，憂鬱，悩みが生じるからである。しかし友よ，実にこのアートマンは，諸々の欲望を確かに離れ，諸々の不善の法を離れ，尋をともない，伺をともない，遠離から生じる喜びと楽のある，初禅に到達して住する。

この限りにおいて，友よ，実にこのアートマンは，最高の現法涅槃を得ている」と。このようにある者たちは，いまここにいる有情の最高の現法涅槃を主張するのです（二見）[9]。

当該経典ではこの後に，第四禅までを説いている。つまり，五見の内容は，五欲の楽に耽けることを最高の現法涅槃であるという主張と，初禅ないし四禅定に住することを最上の現法涅槃であるとするものの五つである。現法涅槃は阿含・ニカーヤから説かれており，今この身体での涅槃の体得を問題としている。しかし，我見を有したままで禅定に住した場合，それはとらわれを持ったままで禅定の安らぎにいることになり，そのような状態を，現法涅槃であると考えるのも間違った見解である。それは禅定の安らぎのみで涅槃を体得できるわけではないということであり，先に確認した「削減経」と同じことを問題としている。「梵網経」はこのような見解を持つ者に対して，このようなとらわれた見地を持つ者には来世がもたらされるであろうと述べている[10]。そしてさらに如実知見の重要性を説き，「如来は，もろもろの受の生起と消滅と楽味と危難と出離を如実に知って，執着なく，解脱した[11]」と述べている。この如実知見に関して副註である *Līnatthapakāsinī* は「『如実に知って』とは，観の慧によって，〔すなわち〕対象に通達することによって，道智によって，迷妄なく通達することによって，受の生起などを，知って，通達して，という意味である[12]」

と述べており，「削減経」と同じく解脱に到達するためには止だけでなく観が重要視されていることが分かる。

以上をまとめると，阿含・ニカーヤでは最高位の禅定である滅尽定に対する表現と「解脱の境地」が厳密には区別されずに説かれることがあったようだ。しかし，禅定の中での安らぎを涅槃であると取り違えることが問題視され，止によって集中した状態で諸法の観察を行う観が重要であるということも繰り返し説かれている。先に確認した『マッジマニカーヤ』第25経「餌食経」に関していうならば「慧によって見て」ということがあってこそ漏の滅尽が可能になるといえる。

2　阿毘達磨仏教の修道論における滅尽定

次に以上のような阿含・ニカーヤの教説を受けて，阿毘達磨仏教において教義学が形成されて行く上で，滅尽定がどのように定義付けされていったのかを，修道論における滅尽定の位置づけを検討する視点から見てみよう。滅尽定は阿毘達磨仏教においては，有為法とされ，無想定とともに五位七十五法の心不相応行に位置する。『倶舎論』第2章第43偈では以下のように定義されている。

> nirodhākhyā tathaiveyaṃ vihārthaṃ bhavāgrajā /
>
> śubhā dvivedyā 'niyatā cāryasyāpyā prayogataḥ //AK II.43//
>
> この滅尽〔定〕と呼ばれるものもまったく同様に〔心心所の滅である。寂静に〕住するためのものである。有頂（非想非非想処地）で生ずる。浄であり，二順受であり，不定でもある。聖者にとって〔のみ〕，加行によって得られるべきものである。

『倶舎論』はまず，滅尽定を無想定と同じく心・心所の止滅としている。無想定と滅尽定は二無心定[13]と呼ばれ，無想定は外道凡夫のみが涅槃と思いあやまって入る定とされる[14]。一方，滅尽定は凡夫たちには入定することができず，聖者たちのみが入ることのできる定として定義されている。聖者たちは寂静を求めて，滅尽定を仮に現世における涅槃だと思って入るとされる[15]。さらにその滅

尽定は非想非非想処を場所として起されるものである。先に確認した阿含・ニカーヤでは，滅尽定は非想非非想処を超えて入る禅定と表現されていたが，阿毘達磨仏教の教義学では非想非非想処に属するとされる。つまり，非想非非想処地は非想非非想処定と滅尽定との二定の場となる。非想非非想処地に住し非想非非想処定を実践している修行者の一部がさらに極まった禅定である滅尽定に入定するわけである。滅尽定が非想非非想処に属するということに関して『婆沙論』は以下のように説いている。

> 問滅尽定自性云何。答不相応行蘊為性。是彼摂故。界者在無色界。地者在根本非想非非想処地。問何故下地無此定耶。答非田非器乃至広説。又滅尽定滅極細心心所故得。下地不順極細心心所滅。(『阿毘達磨大毘婆沙論』T 27, No.1545, 774b8-12)
>
> 問う。滅尽定の自性は云何。答う。不相応行蘊を性と為す。是は彼の摂なるが故に。界は，無色界に在り。地は，根本の非想非非想処地に在り。問う。何が故に，下地に此の定無きや。答う。〔下地は〕田に非ず，器に非ざればなり，乃至広説す。又，滅尽定は極細の心心所を滅するが故に得するに，下地は極細の心心所の滅に順ぜざればなり。

以上のように，滅尽定は非想非非想処より下の地では修することができないとされている。このことを踏まえて，阿毘達磨仏教の修行道における滅尽定の位置づけを考えてみたい。すべての煩悩を断ち切れば覚りが得られるというのが仏教の基本であるが，阿毘達磨仏教では，煩悩を断ち切る道を，見道・修道として描く。その修道の中，欲界の修所断の煩悩の第九品を断じれば不還果に至る。不還はそれから無色界の初禅地の九品を初めとして無色界の非想非非想処地の九品に至るまでの煩悩を断じていかねばならず，非想非非想処地の下下の煩悩を断じることで阿羅漢に至る。一方，滅尽定はその最後の非想非非想処地で起こすものであるから，下八地の煩悩を断じた不還以上の聖者でないと入定することができないことになる。そこでその不還の聖者たちが滅尽定に入る様が『倶舎論』において以下のように説かれている。

> sa hi tasmād vyutthāyāpratilabdhapūrvāṃ savijñānakāṃ kāyaśāntiṃ prati-

labhate, yato 'syaivaṃ bhavati śāntā vata nirodhasamāpattir nirvāṇasadṛśī vata nirodhasamāpattir iti / evam anena tasyāḥ śāntatvaṃ kāyena sākṣātkṛtaṃ bhavati / (AKBh 363.15-18, ad VI.43cd)

かの〔不還〕はその滅尽定から出ると，識を伴った身にいまだかつて得たことのない静けさを得る。それによって，彼に次のような〔思い〕が生じる。「滅尽定は実に静かだ。滅尽定は実に涅槃に似ている」と。このように彼はそ〔の滅尽定〕の静けさを身をもって現証するのである。

滅尽定を得た不還果の聖者は身証（kāyasākṣin）[16]と呼ばれるが，『倶舎論』ではその不還が以上のような体験をすると説かれている。滅尽定は涅槃に似ていると言われるように，修行者はその禅定の中で一時的な擬似涅槃を体験しているといえる。つまり，阿毘達磨仏教においては滅尽定は有為法であり[17]，涅槃とは明確に区別されているが，修道の最終段階で涅槃の模擬体験を経験する定として考えられていたことが分かる。

このことから次のことがいえる。阿毘達磨仏教は，阿含・ニカーヤが説いてきた煩悩の滅というものを，修道論の体系として整理していった。その中で，阿含・ニカーヤを見るかぎりでは明確でない禅定の状態と解脱というものを明確に区分する必要が生じた。その修行道論の体系の中で滅尽定は，最終段階の非想非非想処において生ずるものであり，有為から涅槃へと向かう修行者に，有為の中にありながらも涅槃体験をもらたす法として位置付けられている。

3 『入中論』における滅尽定

以上，阿含・ニカーヤから阿毘達磨仏教における滅尽定（想受滅定）を確認した。次に『入中論』の菩薩階梯における滅尽定の展開を見てみよう。『入中論』の菩薩階梯の展開を追うと，第六地において菩薩は世俗の成立を縁起という仕方でしか成り立ち得ないと理解するための考察（vicāra）を行う。その考察の果として滅尽定が獲得される。その後，その滅尽定は第七地と第八地の流れの中でも重要視されていく。以下その第六地から第八地に至るまでの菩薩階梯

における滅尽定の記述を提示する。

■第六地（第6章）『入中論』における滅尽定の記述は第6章（第六地）の第1偈から確認することができる。[18]

samāhite cetasi saṃsthito ʼsau saṃbuddhadharmābhimukho ʼbhimukhyām /
idaṃpratītyodayadṛṣṭatattvaḥ prajñāvihārāt tu nirodham eti // (MA VI.1)[19]

現前〔地〕において等至している心に住し，等覚者の法を現前にし，これを縁として生ずるという真実を見る彼（第六地の菩薩）は，般若〔波羅蜜〕に住することから，滅に至る。

当該偈の中で「滅を得る」と表現されているのが，滅尽定に入定することを得るということである。チャンドラキールティは『入中論』において第六地を要として展開する菩薩階梯を提示しており，この偈は『十地経』に基いて第六地の菩薩が得るべき徳性について概括した偈頌である。当該偈における「等覚者の法」とは註釈の中で，法性と換言される。[20] つまり，『入中論』は以上のように菩薩が法界を現前にする地を第六地に設定している。その第六地における縁起を観察する行道の最終到達地点として，滅尽定への入定の獲得があるといえる。したがって，この滅尽定に関する記述が第6章の結びにおいても存在する。そこで，その第6章の結びの偈である第224偈からの3偈を確認する。

de ltar blo gros zer gyis snang ba gsal byas pa //
rang gi lag na gnas paʼi skyu ru ra bzhin du //
srid gsum ʼdi dag ma lus gdod nas skye med par //
rtogs de tha snyad bden paʼi stobs kyis ʼgog par ʼgro // (MA VI.224, 340.18–341.1, D 324b6–7, P 385a3–4)

以上のように，彼（第六地の菩薩）は，智慧の光により光明が差し，自らの手の中にあるアーマラカのように，これら三有は残りなく本来不生であると証得して，言説諦（*vyavahārasatya）によって滅に至る。

自註において当該偈頌の「以上のように」という語は，「〔第6章において〕上述したような考察（*vicāra）を示す」[21]と註釈されている。すなわち，第六地の菩薩の実践内容である人法二無我の考察から，縁起の真実を理解し，般若が

極まり，一切法が根本的に不生不滅であり，無自性であるという真実を現前に体得した菩薩が，滅尽定に至ると理解できる。そして，チャンドラキールティは，その般若による考察（vicāra）が行われる場を言説諦・世俗諦のレヴェルで考えている。[22] このことは，勝義（滅）を不可言説の世界と考え，世俗諦を通してその不可言説の勝義に至るとする，チャンドラキールティの二諦説の構造に沿ったものである。すなわち，世俗諦という場で，むろん，この場合も，世俗諦を真実であるととらえるのは凡夫のみであるので，菩薩は唯世俗という場で，人法二無我に関する考察を行い，縁起の道理を証得し，その結果「滅尽定」に到達するのである。

そのような菩薩の有様を以下のように描いて『入中論』は第 6 章を結ぶ。

rtag tu 'gog par gtogs（P rtog; D rtogs. MAK1 に従う）pa'i bsam ldan (P gtan) yin mod kyi (P kyis) //

'gro ba mgon med pa la snying rje 'ang skyed par byed // (MA VI.225ab, MABh 341.10–11, D 325a2, P 384b6–7)

de gong bde gshegs gsung skyes sangs rgyas 'bring bcas ni //

ma lus pa rnams blo yis pham par byed pa 'ang yin // (MA VI.225cd, MABh 341.15–16, D 325a3–4, P 384b7–8)

彼（第六地の菩薩）は常に滅に属する意欲（*āśaya）を持っているのであるが，

守護なき衆生に対する慈悲をも生じている。

これより上の〔地において〕善逝のお言葉から生じた者たち（声聞）と，中仏（独覚）たちを残らず智によって打ち負かす。（第 6 章第 225cd）

kun rdzob de nyid gshog yangs dkar po rgyas gyur pa //

ngang pa'i rgyal po de ni skye bo'i ngang pa yis //

mdun du bdar nas dge ba'i rlung gi shugs stobs kyis //

rgyal ba'i yon tan rgya mtsho'i pha rol mchog tu 'gro //(MA VI.226, MABh 342.2–5, D 325a5–6, P 385a2–3)

世俗と真理（*tattva）とに大きな白い翼を広げたかの王のハンサ（菩薩）

は，大衆のハンサによって尊ばれ，善根の風の力によって，勝者の徳性の海の最勝なる彼岸に至る。

以上のように，菩薩地の転換点として提示される第六地において，詳細な人法二無我に対する考察をなし，滅尽定に至った菩薩は，滅尽定への入定を獲得しつつも有情に対する慈悲を捨てないとされる。つまり，滅尽定に入定することを得つつも慈悲を捨てない姿勢が菩薩には求められている。そのような菩薩は言い換えるならば，二諦に巧みとなった菩薩であり，その菩薩は第六地の行道によって法界を現前とし，仏陀の法を体得しつつも，慈悲を保ちつづけ，その後の菩薩階梯における有情利益に専心する者であるといえる。したがって，第六地でその二諦双方に通暁し真理を体得した菩薩の菩薩道は，七地以降，有情利益に重点を置いた菩薩行へとシフトしていく。

そしてその第七地，第八地の展開においても滅尽定が重要な位置を占めている。

■第七地（第7章） そこで，次に第七地の記述を確認しよう。『入中論』の第7章は非常に短い章であり，註釈を含めても1フォリオにも満たない。そこでは，滅尽定を中心として論が展開し，第七地の菩薩の有様が示されている。

ring du song ba (P ba'i) 'dir ni skad cig dang //
skad cig la ni 'gog par 'jug 'gyur zhing //
thabs kyi pha rol phyin legs 'bar ba thob // (MA VII.1abc)

'gog pa la snyoms par 'jug pa ni yang dag pa'i mtha' la snyoms par 'jug pa yin pas / de bzhin nyid la 'gog pa zhes brjod de 'dir spros pa thams cad 'gag par 'gyur ba'i phyir ro // sa bdun pa ring du (P rab tu) song ba 'dir ni sa drug pa thob pa'i 'gog pa de la byang chub sems dpa' skad cig dang skad cig la snyoms par 'jug par 'gyur te / (MABh 342.14–343.2, D 325a7–b2, P 385a5–7)

〔菩薩は〕この遠行〔地〕においては，刹那，刹那において，滅に入定し，はげしく燃える方便波羅蜜を得る。

滅へ入定すること（滅尽定：*nirodhasamāpatti）とは，実際（*bhūtakoṭi）へと入定することであるから，真如（*tathatā）を滅と述べる。ここ（滅）

においては，一切の戯論が滅するからである。菩薩は，この第七遠行地においては，第六地で得たかの滅へ刹那刹那において入定する。

第七地で菩薩は第六地で得た滅尽定からの刹那ごとの入出定が可能になる。そして，さらにこの自註の記述から，チャンドラキールティは滅尽定を実際（bhūtakoṭi）・真如に入定すること，戯論寂滅の状態であると定義していることが分かる。いずれにおいても滅尽定の「滅尽」の境地を勝義的な地平で表現している。このことから，チャンドラキールティにとって滅尽定を得たことは菩薩が体得すべき真実を証得したことに他ならず，先ほども述べたが，第六地においてその真実を証得することが達成されたということがここからも確認できる。

そして第六地と異なる第七地での重点は，その第六地で得た滅尽定に対して，第七地の菩薩は，刹那ごとの入出定を獲得するということである。刹那ごとの入出定の意味するところは，後に『十地経』などを検討することから明らかになるが，慈悲を有し有情利益をなす菩薩は，一瞬ごとに入出定を繰り返すというさらに巧みな滅尽定への入定の仕方を獲得する。つまり，滅尽定＝真実への直面は重要であるが，それに浸り続けることなく，有情への利益をなすことが第七地の菩薩からは重視されるのである。

■**第八地**（第８章）その滅尽定からの出定を得ることが有情利益のためであるということをより分かりやすく説き示しているのが第八地の記述である。

> 'di yi smon lam shin tu dag 'gyur zhing //
>
> rgyal ba rnams kyis 'gog las slong bar mdzad // (MA VIII.2ab, MABh 344.16–17, D 326a3, P 385b8–386a1)
>
> 彼（第八地の菩薩）の願〔波羅蜜〕は極めて清浄になり，勝者（仏陀）たちが〔菩薩を〕滅から起き上がらせる。

このように『入中論』の第八地では，菩薩は滅尽定にとどまり続けてはならないと言われる。この主張の意図は『入中論』において「そなたはこの様に，静寂な解脱に安住を得ているけれども，凡夫たちは，静寂でなければ，寂滅でもない。ありとあらゆる煩悩が起こり，さまざまな分別によって心が損なわれ

ている。そのような者たちに関心をはらいなさい」という一節を含む『十地経』の経文を引用することで説明されている。[23] つまり第八地の菩薩には有情利益のために，寂静にとどまり続けるのではなく，そこから出定して，菩薩行としての世俗的な行いを捨てない姿勢が求められるのである。[24]

このように，仏陀の真実の証得に力点が置かれていた第六地で，菩薩はその真実そのものに直面する滅尽定を得ることを最終到達地点とする。そして，その真実への直面を経た後，菩薩道は新たな展開を迎える。すなわち，真実の証得を得た上で『入中論』の第七地以降では有情利益の側面が強く押し出されるようになる。その第七地以降の菩薩階梯においても「滅尽定」がキータームとなっていることを確認した。菩薩は第六地で滅尽定＝真実の証得を得た上で，第七地に至ってはその滅尽定に対する刹那ごとの入出定を可能にする。第八地においてはその滅尽定に留まりつづけることなく有情利益をなすことが奨励される菩薩道が描かれる。そこには，真実の証得を得ただけで満足するのではない，大乗の菩薩道が描かれているといえる。

そこで次に，チャンドラキールティが依拠する『十地経』と，チャンドラキールティに先立つ諸文献から以上に確認したような彼の菩薩階梯における滅尽定の思想が形成された過程をたどってみたい。

4 『十地経』における滅尽定

チャンドラキールティが『入中論』の菩薩階梯の中で滅尽定を重視することの背景には，まず彼が依拠した『十地経』の所説がある。本節では『十地経』の菩薩道の中で示される滅尽定について確認しよう。

『十地経』は菩薩の修道階梯を描く際に，初期仏教以来の禅定の枠組みである九次第定を十地の中に取り入れている。このことは，菩薩が第三地において四禅定・四無色定を体得すると説かれ，[25] 滅尽定に関して，「順々に〔禅定に入り〕第九番目の〔禅定である〕滅に入定する。〔そうすれば，〕あれこれうごく心の働きも，流動する分別も消えうせる」[26] と述べられていることから確認でき

る。そして，『十地経』の第七地において以下のように説かれている。

sa khalu punar bho jinaputra bodhisattvo 'syāṃ saptamyāṃ bodhisattvabhūmau sthito gaṃbhīrasya viviktasyāpracārasya kāyavāṅmanaskarmaṇo lābhī bhavati / na cottaraviśeṣaparimārgaṇābhiyogam evotsṛjati / yena parimārgaṇābhiyogena nirodhaprāptaś ca na ca nirodhaṃ sākṣātkaroti // vimukticaṃdro bodhisattva āha // katamāṃ bho jinaputra bodhisattvabhūmim upādāya bodhisattvo nirodhaṃ samāpadyate // vajragarbho bodhisattva āha // **ṣaṣṭhīṃ bho jinaputra bodhisattvabhūmim upādāya bodhisattvo nirodhaṃ samāpadyate / asyāṃ punaḥ saptamyāṃ bodhisattvabhūmau pratiṣṭhito bodhisattvaś cittakṣaṇe cittakṣaṇe nirodhaṃ samāpadyate / ca vyuttiṣṭhate ca / na ca nirodhasākṣātkṛta iti vyaktavyaḥ** / tena so 'cintyena kāyavāṅmanakarmaṇā samanvāgata ity ucyate / āścaryaṃ bho jinaputra yatra hi nāma bodhisattvo bhūtakoṭīvihāreṇa ca viharati na ca nirodhaṃ sākṣatkaroti / (DBhS (K) 122.6-123.8; (R) 61.2-16)[27]

さらにまた，仏子よ，この第七の菩薩地に住するかの菩薩は，甚深にして，遠離なる，動きのない，身・口・意の業を獲得している。また，さらに殊勝なることを希求する努力を捨てることはない。その希求する努力によって，彼は滅尽をすでに得ているけれども，滅を現証してはいない。解脱月菩薩が言う。「ああ，仏子よ，菩薩はいかなる菩薩地において，滅に入定するのか」金剛蔵菩薩は答える。「**ああ，仏子よ，第六の菩薩地において，菩薩は滅に入定する。さらに，この第七の菩薩地に住している菩薩は，心の刹那刹那において，滅に入定し，また，出定する。しかも，滅を現証したとは言われるべきではない。**そのことによって，彼（第七地の菩薩）は，不可思議なる身・口・意の業を備えていると言われる。ああ仏子よ，実に不思議なことである。ここで，菩薩が実際（bhūtakoṭi）に住することをもって住していても，滅を現証していないとは…」（ボールド体部分は『入中論』第７章において引用されている箇所）

この記述から，『十地経』において滅尽定が第六地で体得される禅定として

設定されていることが読み取れる。しかしながら『十地経』の第六地の教説は，滅尽定に関して説いていない。チャンドラキールティの『入中論』での主張はこの『十地経』の第七地の一節に基づいている。チャンドラキールティが滅尽定を実際（bhūtakoṭi）への入定と換言する点も，『十地経』の「実際（bhūtakoṭi）に住することをもって住するも，滅を現証することはない」という一節を踏まえているといえよう。『十地経』の第七地の記述で重要な点は，菩薩は滅に刹那ごとに入出することを得て，滅を現証しないと言われることである。[28] この意味は『八千頌般若経』（*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*）を参照するとより明確になる。『八千頌般若経』では菩薩は実際（bhūtakoṭi）を現証しないと繰り返し説かれる。つまり，滅（実際）を現証するということは，輪廻の生存を滅し涅槃に入ることであり，有情救済を行う菩薩は，滅を現証し般涅槃してしまってはならないのである。[29] この滅を現証し，般涅槃してしまうのは慈悲を有さない自利のみを求める声聞・独覚たちである。『十地経』の第七地で，滅を現証しないということと，刹那ごとの滅への入出定が説かれたことは，菩薩が第六地で滅尽定を体得した上で，次のステップとして第七地においては，滅尽定へのさらに高度な入定の仕方を得ることを意味している。つまり，滅を現証し般涅槃することなく，七地以上の菩薩は有情利益に努めていく。

なお，十地の中で滅尽定が取り上げられている記述は，十地思想の萌芽とされる『マハーヴァスツ』においても確認される。[30]『マハーヴァスツ』では，第六地の菩薩が第七地に進むことができず，退転する理由の一つとして，菩薩たちが滅尽定に入定することに対する羨望を捨てきれないことをあげている。このことは『十地経』において第六地の菩薩が滅尽定へ入定すると説かれたことと軌を一にしており，十地思想の初期の段階で，阿毘達磨仏教の教義学においては不還果の聖者の階梯とされる段階が，菩薩の第六地に相当するとされていたことをうかがわせる。したがって，『十地経』の描く第七地以降の記述は，その段階を超えてはじめて行える有情利益の有様だといえる。

このような『十地経』の思想を受け継いだチャンドラキールティは菩薩が第六地で法界を現前にすると説き，第六地を菩薩地の要所として考えている。そ

してその第六地で得られる滅尽定を真如・実際（bhūtakoṭi）への入定と定義している。一方，第七地では『十地経』と同じく刹那ごとの入出を説き，第八地で諸仏が菩薩を滅尽定から起こすと言われるように，第六地で得た勝義的な境地に留まり続けるのではなく世俗における菩薩行を次なる課題する菩薩の姿が意図されている。なぜならば，滅に留まる菩薩は，そのまま般涅槃してしまい，声聞・独覚同様に有情利益をなさないからである。

5　ナーガールジュナが示す菩薩の十地と滅尽定

さらに，チャンドラキールティが『入中論』の菩薩階梯の展開において滅尽定を重視した背景には，ナーガールジュナの著作『ラトナーヴァリー』の記述がある。『ラトナーヴァリー』の第5章においては菩薩の十地が簡潔に示されている。この『ラトナーヴァリー』の十地はすでに梶山［2008：266–269］によって指摘されているように，『十地経』の比較的古い漢訳（竺法護訳，羅什訳，仏陀跋陀羅訳）との親近さが立証され，ナーガールジュナが『十地経』を知っていたという事実をうかがい知ることができる。その『ラトナーヴァリー』の十地においても，第六地と第七地とにおいて滅尽定が重視されている。以下に確認してみよう。

> ṣaṣṭhī tv abhimukhī nāma buddhadharmābhimukhyataḥ /
> vipaśyanāśamābhyāsān nirodhāvāptipuṣkalā // RĀ V.51 //
> 一方，第六番目の〔菩薩地〕は現前という名称である。仏陀の法に直面する故に。〔また，〕観と止を修習することから，滅が得られ，広大となるからである。
> dūraṃgamā saptamī tu saṃkhyādūraṃgamānvayāt /
> āpadyate nirodhaṃ ca yasmād asyāṃ kṣaṇe kṣaṇe // RĀ V.53 //
> 一方，第七〔地〕は遠行地である。数がはるか遠くに至っているゆえに。そして，ここ（遠行地）において刹那刹那，滅に入定するからである。

このように，第六地と第七地において滅尽定が登場しており，『入中論』の

記述と一致する。このことから，チャンドラキールティは『入中論』を著す際に『ラトナーヴァリー』の十地説を重視しており，ナーガールジュナが『ラトナーヴァリー』において示している十地説に基づいて，『入中論』の菩薩階梯における滅尽定の思想は展開しているということが確認できる。

6 『入楞伽経』における滅尽定

さらに，菩薩の十地において滅尽定が重視されている形跡は『入楞伽経』第4章「現観（abhisamaya）」の章からも見て取れる。『入楞伽経』のこの章の教説は『十地経』に全面的に基づいたものであるといえ，菩薩階梯の流れの中で滅尽定が説かれているが，滅尽定を三昧の安楽と明言している。その『入楞伽経』の記述を確認すると「実際（bhūtakoṭi）」に住しつつも涅槃には入らず，有情利益を行うという菩薩のあり方がより明確に見えてくる。

> ṣaṣṭhīṃ mahāmate bhūmim upādāya bodhisattvā mahāsattvāḥ sarvaśrāvakapratyekabuddhāś ca nirodhaṃ samāpadyante / saptamyāṃ bhūmau punaś cittakṣaṇe cittakṣaṇe bodhisattvā mahāsattvāḥ sarva-bhāvasvabhāvalakṣaṇavyudāsāt samāpadyante, na tu śrāvakapratyekabuddhāḥ / teṣāṃ hi śrāvakapratyekabuddhānām ābhisaṃskārikī grāhya-grāhakalakṣaṇapatitā ca nirodhasamāpattiḥ / (LA 211.10–212.4)
>
> マハーマティよ，第六地を得て，菩薩大士たちと，すべての声聞・独覚たちは滅に入定する。さらに，第七地においては心の刹那刹那に菩薩大士たちはすべての存在の自性の特徴を離れることから，〔滅に〕入定するが，声聞・独覚たちはそうではない。というのは，かの声聞・独覚たちにとっては，滅尽定は，形成行為をもつものであり，すなわち，所取・能取という特徴に陥ったものであるから。

当該箇所では第六地において菩薩・声聞・独覚の三者が滅尽定への入定を獲得すると説かれ，さらに第七地における菩薩の滅尽定への入定の有様が並列して示されている。そして『入楞伽経』も菩薩と声聞・独覚たちの滅尽定を区別

している。声聞・独覚の滅尽定は，先に確認した阿毘達磨仏教に基づけば，有為法に属するものだといえる。また，チャンドラキールティに基づけば，法無我を完全に理解できていないため，所取・能取を断じ切れないままの滅尽定への入定の仕方になるといえる。

さらに『入楞伽経』は，以下のように説いている。

> aṣṭamyāṃ mahāmate bhūmau nirvāṇaṃ śrāvakapratyekabuddhabodhisattvānām bodhisattvāś ca samādhibuddhair vidhāryante tasmāt samādhisukhād yena na parinirvānti / aparipūrṇatvāt tathāgatabhūmeḥ sarvakāryapratiprasrambhaṇaṃ ca syāt yadi na saṃdhārayet, tathāgatakulavaṃśocchedaś ca syāt / acintyabuddhamāhātmyaṃ ca deśayanti te buddhā bhagavantaḥ / ato na parinirvānti / śrāvakapratyekabuddhās tu samādhisukhenāpahriyante / atas teṣāṃ tatra parinirvāṇabuddhir bhavati // (LA 212.13-213.3)
>
> マハーマティよ，第八地において，声聞と独覚と菩薩たちには涅槃がある。しかし，菩薩たちは三昧の中の仏陀たちによってその三昧という安楽から遠ざけられ，それゆえ般涅槃しない。如来の地が円満になっていないことから。そして，もし彼（菩薩）が，〔般涅槃しないということを〕保持しなかったならば，あらゆる〔有情を救済する〕行いの休止があるだろう。そして，如来の家系の断絶があるだろう。かの仏陀世尊たちは不可思議なる仏の偉大性を示す。それゆえ，彼ら〔菩薩〕たちは般涅槃しない。しかし，声聞・独覚たちは三昧という安楽に溺れる。したがって彼らにはそこ〔第八地〕で般涅槃の想いが生じる。

以上のように『入楞伽経』は一貫して三昧，すなわち，滅尽定を安楽としている。菩薩の第八地に相当する声聞・独覚はその滅尽定の安楽に溺れて般涅槃してしまうとされ，「滅尽定という安楽の酔いによって酔いしれ[31]」とも表現される。一方，「菩薩たちは滅尽定という安楽の門を見て，本願と慈と悲を備えて，〔十の〕辺際句の境涯を区別することを知り，般涅槃しない[32]」と説き，慈悲を備えた菩薩の声聞・独覚との違いが示されている。つまり，菩薩たちは，声聞・独覚たちのように安楽に浸り般涅槃するのではなく，滅尽定に巧みとな

った上での有情利益をそれ以降の菩薩道における課題とするのである。したがって，チャンドラキールティが『入中論』において示していたことと同じように，第八地で諸仏が菩薩たちを滅尽定から起こすのである。

以上のことから，まず，滅尽定がそこから涅槃へと通じる高次の禅定段階であることは明らかである。そして，そのような滅尽定が菩薩階梯の中で取り上げられるときに問題となっているのは，滅尽定に入定しながらも有情利益のために再びそこから出定するのか，あるいはそのまま般涅槃してしまうのかという点である。滅尽定という安楽に浸って般涅槃してしまうのが声聞・独覚とされ，利他行を志す慈悲を有する菩薩はこのような高位の禅定状態を獲得しながらも般涅槃せず，そこから出定して有情利益の利他行を行うことが求められる。以上，『十地経』『ラトナーヴァリー』『入楞伽経』の所説を踏まえれば，チャンドラキールティの滅尽定の思想は必ずしも特異であるとはいえない。

7　まとめ

阿含・ニカーヤの段階で四禅定・四無色定の上に滅尽定という仏教独自の最高位の禅定が付加され，九次第定が形成された。それはそのまま阿毘達磨仏教に引き継がれ，大乗経典にも受け継がれた。以上の検討から阿含・ニカーヤの段階では，必ずしもその想受滅定の境地と解脱の境地とを区別せずに説いていることが確認できた。しかしながら，禅定の安らぎのみで涅槃を体得したと誤想する比丘の説話も多く見られ，禅定のみでなく如実知見を伴うことの重要性が説かれていた。その阿含・ニカーヤを受けた阿毘達磨仏教の教義学においては，滅尽定を有為法に位置づけ，明確に涅槃と区別する体系を構築していく。その阿毘達磨仏教の修道論における位置づけを確認していくと，滅尽定は，修道の最終段階に位置する非常に高次な禅定であり，高位の聖者，すなわち身証の不還しか入定することのできない定とされ，その内容は擬似涅槃を体得する定として説かれていた。つまり，有為法であり明確に涅槃と区分されているが，非常に涅槃と近しい法として設定されているのである。

一方，大乗仏教では，十地思想が形成され，その十地の次第の中に九次第定が取り入れられた。その際に，『十地経』や『マハーヴァスツ』の所説から確認できるように，その滅尽定の体得を菩薩道の最終段階に位置づけるのではなく，第六地に据えるということが行われた。そして，七地以上の菩薩地で滅尽定が説かれる際には，菩薩はその滅尽定に留まらないという点に力点が置かれるようになる。つまり，その菩薩階梯では，定と慧の面は第六地までで円満となり，真実を証得した上で，はじめて残りの菩薩地における利他行という課題が可能になるとしている。阿毘達磨仏教は修道の最終段階で擬似涅槃を体得する定として滅尽定を位置付けていたが，大乗教義学においては，その阿毘達磨仏教の構築した修道論のシステムの上にさらに有情利益の菩薩道を付加して新たな菩薩道を切り開いた意図が見て取れる。すなわち大乗仏教においては，声聞・独覚のように高次の禅定を得ただけで満足して般涅槃してしまうのではなく，そこからさらなる有情利益をなすことを菩薩の重要な課題とした。したがって，その大乗菩薩の利他という課題を修道論の中に描く際に，真実の証得の後に，滅尽定から利他行へと向かう，新たな仏道が開かれたのであった。

チャンドラキールティは，そのように説く大乗経典とナーガールジュナの所論を受けて『入中論』を著していることを確認した。具体的には，菩薩は第六地で真如に入定することである滅尽定に至るといわれる。菩薩にとってはその真実の証得と同趣旨である滅尽定への入定を得た上で新たな菩薩道が開かれる。それが第七地で有情利益のために滅を現証しない仕方で刹那ごとの滅尽定への入出を獲得するといわれ，第八地においては滅尽定から諸仏によって起こされると説かれる。その菩薩道において，菩薩たちは慈悲を有しているからこそ，有情利益を捨てないといえ，真実への直面といえる滅尽定に入り続けることなく，そこから出定して，慈悲に基づく有情利益の菩薩行をなす。

以上の検討から，ツォンカパがチャンドラキールティの提示する滅尽定を「〔帰謬派〕独自の滅尽定（'gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa）」と註釈していたが，阿毘達磨仏教の議論との比較においては，確かにチャンドラキールティの滅尽定思想は異色であるが，彼だけに特有の思想であるというよりは，

大乗仏教において構築された修道論のプロセスであるといえる。

略号表

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu), P. Pradhan (ed.), Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna,1967.

ASP *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā,* P. L. Vaidya (ed.), Dharbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.

BBh *Bodhisattvabhūmi,* U. Wogihara (ed.), Tokyo, 1930–1936.

BhKI *First Bhāvanākrama* (Kamalaśīla), Giuseppe Yucci (ed.), Serie Orientale Roma vol.IX, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma, 1958.

D Tibetan Tripiṭaka, sDe dge edition.

DBhS *Daśabhūmikasūtra,* (K) Kondō Ryūkō (ed.), Tokyo: Daijyō Bukkyō Kenyō-Kai, 1936; (R) J. Rahder (ed.), Paul Geuthner, Paris, 1926.

DBhVy *Daśabhūmivyākhyāna* (Vasubandhu), P 5494, D 3993.

DN *Dīghanikāya,* T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter (eds.), 3vols., PTS, London, 1890–1911.

GR *dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dgongs pa rab gsal* (Tsong kha pa Blo bzang grags pa), Z hol ed. Ma. Tohoku No. 5408.

LA *Laṅkāvatārasūtra,* Bunyiu Nanjio (ed.), Otani University Press, Kyoto, 1923.

MA *Madhyamakāvatāra* (Candrakīrti), see MABh.

MABh *Madhyamakāvatārabhāṣya* (Candrakīrti), Louis de la Vallée Poussin (ed.), BB. IX, St. Pétersbourg, 1907–1912. (repr. Osnabrück, 1970; Tokyo, 1977.), D 3862, P 5263.

MAK1 *Madhyamakāvatārakārikā,* P No.5261.

MN *Majjhimanikāya,* V. Trenckner (ed.), 3vols., PTS, London, 1888–1899.

Mv *Mahāvastu,* (É. Senart (ed.), 3vols., Tome Premier, Paris, 1882–1897.

Nidd I *Mahā-niddesa,* Louis de La Vallée Poussin and Edward Joseph Thomas (eds.), 2vols., PTS, London, 1917–1916.

P Tibetan Tripiṭaka, Peking edition.

Ps *Papañcasūdanī* (Buddhaghosa), J. Woods and D. Kosambi (eds.), 3vols., PTS, London, 1922–1938.

RĀ *Ratnāvalī* (Nāgārjuna), Michael Hahn (ed.), Bonn: Indica et Tibetica, 1982.

Sv *Sumaṅgalavilāsinī* (Buddhaghosa), T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter (eds.), PTS, London, 1929–1932.

Sv-pṭ *Līnatthapakāsinī* (Dhammapāla), L. de Silva (ed.), 3vols., PTS, London, 1970.

T 高楠順次郎・渡邊海旭監修小野玄妙編『大正新脩大蔵経』大蔵出版，東京，1924–1932.

TJ *Madhyamakahṛdayavṛttitarkajvālā* (Bhavya/Bhāviveka?), D No. 3856; P No.

5256; Eckel [2008].

Vims *Visuddhimagga* (buddhaghosa), C.A.F. Rhys Davids (ed.), PTS, London,1975.

文献表

Eckel, Malcolm D.

2008 *Bhāviveka and his Buddhist opponents.* Harvard Oriental Series v. 70. Cambridge, Mass. : Distributed by Harvard University Press, 2008.

李学竹（Li Xuezhu）

2012「《入中論》第六章 1-97 頌校勘」『中国蔵学』1, pp.1-16.

一郷　正道

2011『瑜伽行中観派の修道論の解明―『修習次第』の研究―』2008 年度～2010 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）成果報告書 .

大竹　晋

2006『十地経論 II』大蔵出版 , 東京 .

太田　蕗子

2008「ツォンカパ著『密意解明』における菩薩の修道階梯―滅尽定を中心として―」『日本西蔵学会々報』54, pp.33-45.

2011「菩薩は滅を現証しない―『入中論』の十地思想における菩薩と声聞・独覚との差異をめぐって―」『印度学仏教学研究』60-1, pp.98-103.

小川　一乗

1988『空性思想の研究 II ―テキスト・翻訳篇―』文栄堂 , 京都 .

梶山　雄一

2008『梶山雄一著作集　第四巻　中観と空 I』春秋社 , 東京 .

岸根　敏幸

2001『チャンドラキールティの中観思想』大東出版社 , 東京 .

長崎　法潤

1959「滅尽定について」『大谷学報』39-2, pp.64-76.

1979「阿含における自覚の一考察―解脱と想受滅―」『日本仏教学会年報』44, pp.65-79.

福田　琢

1995「二無心定の成立」『同朋仏教』30, pp.17-50.

註

(1) zhi gnas ji tsam khyad zhugs pa tsam gyis lhag mthong de tsam du khyad zhugs par 'gyur la / sa lnga par bsam gtan gyi phar phyin phul du byung ba thob pas / de la brten nas 'dir sher phyin phul du byung ba yin no // de'i phyir 'gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa 'di nas 'thob pa yin no // (GR 63b4-5)「止にすぐれて悟入すればするほど，観にもすぐれて悟入することになるのである。〔だから，〕第五地において，禅定波羅蜜の最勝性を得たことによって，それに拠りて，ここ（第六地）で，般若波羅蜜の最勝性を〔得る〕のである。したがって，〔帰謬派〕独自の滅尽定がここ（第六地）から得られるのである」

(2) 詳細は太田［2008］を参照されたい。

(3) 『中阿含経』178 経「猟師経」（T 1, No.26, 720a21-24）謂比丘度一切非有想非無想処。想知滅身触成就遊。慧見諸漏尽断知。是謂魔王魔王眷属所不至処。

(4) visattikā ti. ken' aṭṭhena visattikā ? visatā ti visattikā. visālā ti visattikā. visaṭā ti visattikā. visakkatī ti visattikā. visaṃharatī ti visattikā. visaṃvādikā ti visattikā. visamūlā ti visattikā. visaphalā ti visattikā. visaparibhogā ti visattikā. visālā vā pana sā rūpe taṇhā sadde gandhe rase phoṭṭhabbe kule gaṇe āvāse lābhe yase pasaṃsāya sukhe cīvare piṇḍapāte senāsane gilānapaccayabhesajjaparikkhāre kāmadhātuyā rūpadhātuyā arūpadhātuyā kāmabhave rūpabhave arūpabhave saññābhave asaññābhave nevasaññānāsaññābhave ekavokārabhave catuvokārabhave pañcavokārabhave, atīte anāgate paccuppanne diṭṭhasutamutaviññātabbesu dhammesu visaṭā vitthatā ti visattikā. (Nidd I 9.9-21)

(5) 同じく「聖者の律」という表現を用いている『デーガニカーヤ』第 2 経「沙門果経」（*Sāmaññaphalasutta*）の『アッタカター』では以下のように註釈されている。**vuddhi h' esā, mahārāja, ariyassa vinaye** ti esā, mahārāja ariyassa vinaye buddhassa bhagavato sāsane vuddhi nāma. (Sv PTS, vol.1 236.30-31)「『大王よ，これこそが聖者の律における繁栄である』とは，大王よ，これこそが聖者の律における，すなわち仏陀世尊の教説における繁栄である」

(6) 『中阿含経』91 経「周那問見経」（T 1, No.26, 537b25-29）周那。於聖法律中何者漸損。比丘者離欲離悪不善之法。至得第四禅成就遊。
　彼作是念我行漸損。周那。於聖法律中不但是漸損。有四増上心現法楽居。

(7) 『中阿含経』91 経「周那問見経」（T 1, No.26, 537c1-5）周那。於聖法律中不但是漸損。比丘者度一切色想。至得非有想非無想処。成就遊。彼作是念我行漸損。周那。於聖法律中不但是漸損。有四息解脱。離色得無色。

(8) 『長阿含経』21 経「梵動経」（T 1, No.1, 93b16-18）諸有沙門婆羅門。作是見作是論説。我於現在五欲自恣。此是我得現在泥洹。是第一見。

(9) 『長阿含経』21 経「梵動経」（T 1, No.1, 93b18-22）復有沙門婆羅門作是説。此

是現在泥洹。非不是復有。現在泥洹微妙第一。汝所不知独我知耳。如我去欲悪不善法。有覚有観。離生喜楽入初禅。此名現在泥洹。是第二見。

(10) ime diṭṭhiṭṭhānā evaṃgahitā evaṃparāmaṭṭhā evaṃgatikā bhavissanti evaṃabhisamparāyā. (DN 1 *Brahmajālasutta*, PTS, vol.1, 38.33-35)「このように捉えられ，このようにとらわれたこれたの見地は，これこれの行方，これこれの来世をもたらすであろう」

(11) vedanānaṃ samudayañ ca atthagamañ ca assādañ ca ādīnavañ ca nissaraṇañ ca yathābhūtaṃ viditvā anupādā vimutto bhikkhave tathāgato. (DN 5 *Brahmajālasutta*, PTS, vol.1, 38.17-19)

(12) yathābhūtaṃ viditvā ti vipassanāpaññāya vedanāya samudayādīni ārammaṇapaṭivedhavasena maggapaññāya asammohapaṭivedhavasena jānitvā, paṭivijjhitvā ti attho. (Sv-pṭ PTS, vol.1 196.3-6)

(13) 二無心定の成立に関しては，福田［1995］参照。

(14) kim artham enāṃ samāpadyante / **niḥsṛtīcchayā** / (AK II.42b) niḥsaraṇam eṣāṃ manyante / ato mokṣakāmatayā samāpadyante / (AKBh 69.5-7)「何のためにこの〔無相定〕に入定するのか。**出離を求めるためである**。この〔無想定〕を出離（解脱）であると考える。それゆえ，解脱を求めることから，〔無想定に〕入定するのである」

(15) **āryasya** (AK II.43d') na hi pṛthagjanā nirodhasamāpattim utpādayituṃ śaknuvanty ucchedabhūrutvād āryamārgabalena cotpādanād dṛṣṭadharmanirvāṇasya tadadhimuktitaḥ / (AKBh 70.15-17)「**聖者にとって〔のみある〕**というのは，凡夫たちは滅尽定を起こすことができない。断絶を恐れることから。また，聖者たちの道によって起こすものだからである。現法涅槃としてそれを信解することから」

(16) **nirodhalābhy anāgāmī kāyasākṣī punar mataḥ //AK VI.**43**cd** // nirodhalābho 'syāstīti nirodhalābhī / yo hi kaścid anāgāmī nirodhasamāpattilābhī sa kāyasākṣīty ucyate, nirvāṇasadṛśasya dharmasya kāyena sākṣātkaraṇāt / (AKBh 363.12-14)「**さらに，滅を得る不還が身証であると考えられる**。その〔不還〕には滅尽〔定〕の獲得があるから『滅を得る〔不還〕』である。ある不還が，滅尽定を得るとき，彼は身証と言われる。涅槃に似た法を身をもって現証するからである」

(17) 阿毘達磨仏教では滅尽定を五位七十五法の中の心不相応行の中に位置づけ，有為法であると定義している。しかしながらブッダゴーサは『清浄道論』において次のように述べている。

nirodhasamāpatti saṅkhatā ti ādi pucchāyaṃ pana saṅkhatā ti pi asaṅkhatā ti pi lokiyā ti pi lokuttarā ti pi na vattabbā. kasmā ? sabhāvato n' atthitāya. yasmā pana sā samāpajjantassa vasena samāpannā nāma hoti, tasmā nipphannā ti vattuṃ vattati, no anipphannā. (Vims 709.10-14)「滅尽定は有為であるか，無為であるか，云々という問に対して有為であるとも，無為であるとも，世間的であるとも，出世間であるとも答えるべきではない。なぜか。本性として存在しないものであるから。それ（滅尽定）は，入定者によって入定したと言われるから，それゆえ，完成されたと言うことがあるのであって，成立しないのではない」

このことから南伝仏教においては滅尽定を有為とも無為とも定義していなかったことが見て取れる。

(18) 岸根［2001：237］は，この『入中論』第6章第1偈を引用し，滅というタームに関して，「このタームが出てくることはかなり唐突な印象を受ける。少なくとも，この記述を見るだけでは，厳密な意味の特定は不可能である。さらに，このタームは，現前地を説く本元である『十地経』の記事によっても明瞭ではない。というのも，『十地経』第六地で「止滅」というタームがそれほど重要な意義を与えられているとは思えないからである。ところが，チャンドラキールティはこのタームを，現前地の目的という重要なポイントとの関係で捉えている」と述べている。
しかし，本稿で確認することから明らかであるように，この滅は「滅尽定」の滅であり，『十地経』本体や『ラトナーヴァリー』においても，確認することができる。このような岸根氏の誤解は，『入中論』第6章のみを見てその意味を理解しようとしたことに基づくといえる。

(19) 李［2012］参照。チベット訳は以下の通り。
mngon du phyogs par mnyam gzhag sems gnas te // rdzogs pa'i sangs rgyas chos la mngon phyogs shing // 'di rten 'byung ba'i de nyid mthong ba de // shes rab gnas pas 'gog pa 'thob (D thob) par 'gyur // (MA VI.1, MABh 73.2–5, D 244a3–4, P 292a5–6)

(20) gzugs brnyan dang 'dra ba'i chos nyid khong du chud pa'i phyir dang / byang chub sems dpa' rnams kyis byang chub sems dpa'i sa lnga par lam gyi bden pa la dmigs pa'i phyir dang / rdzogs pa'i sangs rgyas kyi chos la mngon du phyogs pa'i phyir na sa 'di la mngon du gyur ba zhes bya'o // (MABh 73.12–16, D 244a6–7, P 292a8–292b2, ad VI.1)「(1) 影像に等しき法性を了解する故に，(2) 菩薩たちは菩薩の第五地において，道諦を所縁とする故に，(3) 等覚者の法を現前（*abhimukha）にする故に，この地を現前（*abhimukhī）という」

(21) de ltar gyi sgra ni ji skad bshad pa'i rnam par dpyad pa nye bar ston pa'i don du'o // ji skad bshad pa'i rnam par dpyad pa las byung ba'i blo gros kyi 'od zer gyis de kho na nyid mthong ba la gegs (P bgegs) byed pa'i mun pa 'joms pa'i snang ba gsal bar byas pa gang la yod pa'i byang chub sems dpa' de la de skad ces bya'o // (MABh 341.2–6, D 324b7–325a1, P 385a4–5, ad VI.224)「以上のようにという言葉は，上述したような考察（*vicāra）を示す意味である。上述したような考察（*vicāra）から生じた智慧の光によって真実を見ることを妨げる闇を取り除く光明が差した，かの菩薩に対して，このように言われる」

(22) この偈の註釈で，チャンドラキールティは言説諦を世俗諦と換言している。
de ni kun rdzob kyi bden pa'i stobs kyis 'gog pa la snyoms par 'jug par 'gyur ro // (MABh 341.6–8, D 325a1, P 385a5–6)「彼は世俗諦の力によって，滅に入定する」

(23) MABh 345.6–346.2, D 326a6–3, P 386a4–b1 参照。

(24) 菩薩の第八地において，諸仏が滅尽定に住している菩薩に対して出定を促すという記述は，他の中観派の論者の著作にも登場する。
『思択炎』nyon mongs pa dang bcas pa'i spyod pa yongs su rdzogs ma thag nyid du byang

chub sems dpa' des byang chub sems dpa'i gnas pa zab mo dben pa la gnas pa thob par 'gyur ro // de ni 'gog pa la snyoms par zhugs pa'i dgra bcom pa bzhin du gang gi tshe skye ba med pa'i chos la bzod pa la gnas pa de'i tshe de la sangs rgyas bcom ldan 'das rnams kyis bslang bar ma mdzad na de nyid du mya ngan las 'da' bar 'gyur ro zhes bya ba ni mdo'i tshig yin no // (TJ Eckel [2008: 341.17-23])「有染汚の行を完成させるやいなや，かの菩薩は甚深にして遠離なる菩薩の住に住することを得るであろう。彼は滅尽定に入れる阿羅漢のように，無生法忍に住するとき，そのときそこ（第八地）で仏陀世尊たちによって起こされることがないならば，まさにそこで涅槃するであろう，というのは，経の言葉である」

『修習次第』etau prajñopāyau dvāv api sarvakālam eva sevanīyau bhūmipraviṣṭair api na tu prajñāmātraṃ nopāyamātraṃ yataḥ sarvāsv eva daśasu bhūmiṣu bodhisattvasya pāramitāsamudācāraḥ paṭhito daśabhūmikādau / "na ca pariśeṣāsu na samudācarati" iti vacanāt / aṣṭamyāṃ ca bhūmau bodhisattvasya śāntavihāriṇo buddhair vyutthānaṃ tad virudhyeta / tac ca tatas tatra pāṭhād avagantavyam / (BhK I 195.6-13)「この智慧と方便の両者共，地に入った〔菩薩たち〕によってつねに実践されるべきである。しかし，ただ智慧のみ，方便のみ〔を実践すればいいというもの〕ではない。なぜならば，十地のすべてにおいて菩薩は諸ハラミツをともに実践することが『十地経』（*Daśabhūmika*）等に説かれている。〔すなわち『十地経』において〕「〔菩薩は〕残り〔の諸ハラミツ〕をも，ともに実践しないのではない」と述べられているからである。そうでなければ，第八地において寂静に住する菩薩への，諸仏による〔禅定からの〕出定〔の促し〕，それと矛盾することになってしまう。したがって，それについてはそれ（『十地経』）を熟読することによって理解されるべきである（一郷［2011：17.2-9］参照）」

(25) DBhS (K) 55.13-56.10; (R) 33.31-34.16 参照。

(26) anupūrveṇa navamaṃ nirodhaṃ samāpannaḥ / sarveñjitamananāsyaṃ ditavikalpāpagato bhavati / (DBhS (K) 134.16-135.1; (R) 64.14-15)

(27) 『漸備一切智徳経』（T 10, No.285, 480b15-20）又問仏子。何謂菩薩所住道地也。乃至菩薩寂滅成就正真之行。答曰。已逮六住。能行斯法。乃致菩薩七住道地。一時発心。心数数念。輒致寂滅成就正行。不当謂之証於滅尽。以是之故。身口心行。不可思議。従其所作。此之謂也。若有菩薩。遊于本際。而不取証。

(28) 『菩薩地』（*Bodhisattvabhūmi*）「住品」は当該箇所を以下のようにまとめている。ṣaṣṭhe ca vihāre bodhisattvo nirodhaṃ samāpadyate / asmiṃs tu pratikṣaṇaṃ samāpadyate / idaṃ cāsyātyadbhutaṃ karmācintyam / yad bhūtakoṭivihāreṇa ca viharati na ca nirodhaṃ sākṣātkaroti / (BBh 348.21-349.1)「第六住において菩薩は滅に入定するが，この〔第七住〕においては刹那ごとに〔滅に〕入定〔し出定〕する。実際に住することによって住するも滅を現証することはないこと，これが彼の〔菩薩〕の非常に驚くべき不可思議な業である」

また，『十地経論』（*Daśabhūmivyākhyāna*）は「滅を現証しないということ」を輪廻の生存を捨てないと註釈している。

yang dag pa'i mtha' la gnas pa'i phyir dang / 'gog pa mngon sum du mi byed pa'i phyir srid pa mi gtong bas gnas pa'i khyad par ston te / (DBhVy D 216a5, P 273b5-6)「実際に住することから，また，滅を現証しないことから，〔輪廻の〕生存（*bhava）を捨てずに住するという差別が示された」（大竹［2006: 528-529］）

(29) 詳細は太田［2011］を参照されたいが，例えば，『八千頌般若経』は次のように説いている。

duṣkarakārako bodhisattvo mahāsattvaḥ / paramaduṣkarakārako bodhisattvo mahāsattvaḥ yaḥ śūnyatāyāṃ carati, śūnyatāyāṃ ca viharati, śūnyatāṃ ca samādhiṃ samāpadyate, **na ca bhūtakoṭiṃ sākṣātkaroti** / tat kasya hetoḥ ? tathā hi subhūte bodhisattvasya mahāsattvasya sarvasattvā aparityaktāḥ / tasyeme evaṃrūpāḥ praṇidhānaviśeṣā bhavantimayaite sarvasattvāḥ parimocayitavyā iti / (ASP 185.20-24)「菩薩大士とは難行の行者である。空性を行じ，空性において住し，空性三昧に入定しながら，**実際を現証しない**とは，菩薩大士は最高の難行の行者である。それはなぜか。というのは，スブーティよ，菩薩大士は，あらゆる有情を見捨てるわけにいかないからである。彼には『私はあらゆる有情を解放しなければならない』という，こういう性質の特別な諸誓願（別願）がある」

このように，菩薩が実際（bhūtakoṭi）を現証しないのは，有情利益のためであり，彼が立てた誓願に込められているものであるということが分かる。

(30) evam ukte āyuṣmān mahākāśyapo āyuṣmantaṃ mahākātyāyanam uvāca // ye ime bho jinaputra satvā samyaksaṃbodhāyepraṇidhenti te katibhir ākāraiḥ ṣaṣṭhyāyāṃ bhūmau vartamānāḥ saptamāyāṃ bhūmau vivartanta iti // evam ukte āyuṣmān mahākātyāyana āyuṣmantaṃ mahākāśyapam uvāca // dubhi khalu bho dhutadharmadhara ākārair bodhisatvā bodhāya praṇidhento ṣaṣṭhyāyāṃ bhūmau vartamānāḥ saptamāyāṃ bhūmau vivartanti // katam ehi dubhi //saṃjñāvedayitanirodhasamāpattiyo ca spṛhayanti yasmiṃ ca kāle samyaksaṃbuddhā satvaparijñayā ahaṃ mahātmā śamīkaro tti devatāṃ satkṛtya avahitaśrotā śṛṇvanti // (Mv I 126.16-127.6)「以上のように言われたとき，長老マハーカーシャパは，長老マハーカーティヤーヤナに言った。「ああ，勝者の子よ，正等菩提を求めて誓願を立てた有情達，そのような者たちが，一体いかなる理由によって第六地にいながらも，第七地に進まないのか」と。このように言われて，長老マハーカーティヤーヤナは，長老マハーカーシャパに答えた。「ああ，頭陀法を保つ者よ，実に二つの理由から，菩提を求めて誓願を立てた菩薩たちは，第六地にいながらも第七地に進まない。二つとは何かというと，（1）彼らが想受滅定に入定した者たちを羨む，また，（2）彼らは有情を熟知する正等覚者達がいる時に，『我が寂静をもたらす偉大な者である』として，神々しい人（仏）達を敬い，耳を傾けて〔教えを〕を聞かない，〔という二点から〕である」

(31) punar aparaṃ mahāmate śrāvakapratyekabuddhā aṣṭamyāṃ bodhisattvabhūmau nirodhasamāpattisukhamadamattāḥ svacittadṛśyamātrākuśalāḥ svasāmānyalakṣaṇāvaraṇavāsanāpudgaladharmanairātmyagrāhakadṛṣṭipatitā vikalpanirvāṇamatibuddhayo bhavanti, na viviktadharmamatibuddhayaḥ / bodhisattvāḥ punar mahāmate nirodhasamādhi-

sukhamukhaṃ dṛṣṭvā pūrvapraṇidhānakṛpākaruṇopetā niṣṭhapadagativibhāgajñā na parinirvānti / (LA 213.16–214.4)「さらにまた，マハーマティよ，声聞と独覚たちは菩薩の第八地において滅尽定という安楽の酔いによって酔いしれ，自らの心の顕現にすぎないことに巧みとならず，自相と共相という障礙の習気と人と法の無自我に着する見に陥り，分別された涅槃という考えの智が生じる。遠離の法という考えの智は生じない。さらに，マハーマティよ，菩薩たちは滅尽定という安楽の門を見て，本願と慈と悲を備えて，〔十の〕辺際句の境涯を区別することを知り，般涅槃しない」

(32) 注 31）参照。